

『解放されたエルサレム』第四歌の全体訳と第五歌の部分訳

—II canto 4 e una parte del canto 5 della *Gerusalemme liberata*—

水野 留規

MIZUNO, Ruki

Questo saggio contiene la traduzione del quarto canto e di una parte del quinto canto della *Gerusalemme liberata*, eseguita dal sottoscritto. Gli argomenti del quarto canto sono: il concilio infernale, Armida inviata dal mago Idracte al campo cristiano, la fantastica storia narrata da Armida, il rifiuto di Goffredo e la disperazione di Armida, l'intervento di Eustazio che difende Arimida, e le arti di Armida. È un canto senz'altro importante, in quanto, secondo l'autore Torquato Tasso, "da questo canto, quasi da fonte, derivano quasi tutti gli episodi." Nel canto quinto Armida continua a esercitare le sue seduzioni e riesce a attirare a sé molti guerrieri cristiani.

キーワード: アルミィダ、タッソ、魔術

トルクワート・タッソ（一五四四―九五）の『解放されたエルサレム』*Gerusalemme liberata*（全二十歌）はイタリアのルネサンス文学を代表する作品のひとつであり、第一次十字軍（西暦一〇九六年〜九九年）の事績を素材としている。その第四歌は、作品全体を五つの段に分ける説⁽¹⁾に従うと第二段の最初に位置づけられ、この第四歌からタッソ自身の言葉を借りれば⁽²⁾、作品中の「大半のエピソードが泉のほとく湧き出ていく」。つまり、先行する第一段（第一歌〜第三歌）で史実や地理や登場人物の性格・力量などを把握した読者は、この第四歌にいたって漸く空想の物語にどっぷりと浸かることになるのである。

第四歌は大きく四つの部分に分けることができよう。まず、(一)キリスト教軍による聖地奪回の企てを阻もうとする地獄の悪魔たちの会議の場面、(二)イスラム側の魔術師イドラオーテが美女アルミィダをキリスト教軍の陣営に送り込む場面、(三)アルミィダが自らの不幸な境遇をキリスト教軍司令官ゴッフレードの前で語

る場面、(四)ゴフフレードによる拒否発言とそれに対する周囲の抗議や発言撤回等の場面である。本稿では第四歌の全体と、第四歌の内容と関係が深い第五歌の一部を訳出する³⁾。

第四歌

一 キリスト教軍兵士たちが戦車の建設に懸命に取り組み、それを早く戦いに投入しようとしていたとき、人類の大いなる敵であるかの王〔冥界の王ルチーフエロ〕はキリスト教軍の方に邪悪な視線を向けると、かれらがいまや満足し、喜んでいるのを見て怒りのあまり両唇を噛み、傷ついた雄牛が自らの苦しみを表すときのように、吠え、吐息を荒くして怒りを吐き出した。

二 この王はこれまででも万事にわたって考えを巡らせ、キリスト教徒に決定的な打撃を与えようとしてきたのであったが、この機にいたり手下の輩に向って（恐るべき会議を開くべく）自らの王宮に集合するように命じた。ああ、何という愚、神の意志への反抗をたやすい仕事のごとくに考へるとは、愚者は天を凌ごうと試み、怒った神の右手から発せられる雷鳴の物凄さを忘れていたのだ。

三 地獄のトランペットのかすれた音色が永遠の闇に包まれた世界の住民たちを呼び集める。広漠な暗黒の洞窟が揺れ動き、その時に発せられる轟に光を含まない大気が反響する。天上の彼方から振り落される稲妻でさえもかくのごとき大轟音を伴うことはない、蒸気で重くなった大地がその蒸気を自らの内に封印するときも、かくも大きな地震が起きることはない。

四 瞬く間に冥界の悪魔たちがそれぞれ群れを成して四方八方から現れ、厳めしい「地獄の」城門から入ってくる。おお、それらは何と奇怪で、恐ろしい姿をしていることか。かれらの目は恐怖と死で満ち溢れている。獣の足跡を地面に刻む悪魔もいる、人間の顔をした者どもの頭髮は絡み合った蛇だ。そしてかれらの尻からは巨大な尾が延び、それは鞭のごとく巻いたり伸びたりしている。

五 不浄なるハルピュイア、無数のケンタウロスやスピックス、青い顔をしたゴルゴンらの姿がそこにはある。大勢の貪欲なスキュラたちが吠え、ヒュドラーたちがヒューヒューと、ピュートーンたちがシューシューと音をたてる。キマイラは真っ黒な炎を吐き、恐ろしいポリリュペーモスとゲーリュオンもいる。不気味な怪物たちの中には、正体不明のものや見られたことのないものもいて、かれらは容貌こそ雑多であるが、混じり合って渾然一体となっている。

六 かれらは残忍なる王の前に進み出ると、或る者はその左に、或る者はその右に座った。中央にはプルートーンが坐し、その右手には荒々しく、重たい笏が握られている。いかなる海の岩礁も、いかなる高山の絶壁も、カルペ岬も、アトランテ山脈も、この王の前では小さな丘のようにしか見えなまいと思われほど王は高く自らの頭と大きな角を持ち上げている。

七 狂暴な表情には不気味な威厳が漂い、そのことが恐怖を増長させ、王自身をいっそう高慢にする。眼は赤みを帯び、その毒を含んだ視線は不吉な彗星のごとく輝く。剛毛の濃い髭が顎を覆い、

その長い髭は毛深い胸にまで垂れている。そして大渦巻きが起るときのように黒い血で汚れた王の口が開かれる。

八 モンジベツロ山からは硫黄と火花を含んだ煙が悪臭や轟音とともに発せられるが、粗野な口から発せられる黒い吐息や、その悪臭と火花は「モンジベツロ山から出るもの」とそっくりである。

王が話している間、ケルペロスは吠えるのをやめ、ヒュドラーは王の声を聞いて黙り、コキュトスはその流れを止め、地獄は揺れ動いた。次のような言葉を述べる、王の大きな声が響き渡った。

九 「冥界の守護神どもよ、汝らは太陽の上方に置かれた、汝らの原初の地に坐するに値するというのに、かの不幸な出来事によって余と共に、幸いなる王国からこの悲惨な困われの地へと落とされた。他の者「神」が古に抱いた疑いとその報復とは遍く知られ、われらの気高き志についても然りである。いまや星々はかの者「神」によってその意のままに支配され、われらは反逆者として裁かれるにいたった。

十 金色の太陽や星々を携えた天空がもたらす晴れやかで清らかな日の代わりに、かの者はわれわれをこの深い深淵の中に押し込めた。加えてその者は、われわれが過去の栄誉を回復しようとしていないように、その後(ああ、それを思い出すのは何と辛いことか、これこそは余の苦しみをさらに痛ましくするものなのだ)卑しくて、地上の卑しい土から生まれたかの男を天の幸いなる座に呼んだのだ。

十一 かの者はそれだけのことをしても十分とは思わず、われらをさらに苦しめるためだけに、息子であるかの男「キリスト」を

犠牲にしたのだ。かの男は「ここへ」やって来て、地獄の扉を破壊して、われらの王国に憚ることなく入ってきて、宿命によってわれらに与えられた魂をわれらから奪うと、かくも価値ある戦利品を天に戻し、この勝者であるかの男は誇らしげに、われらを辱めんとして降伏した地獄の証である魂たちを天で行進させたのだ。

十二 だが、余はなぜ自らの苦悩を吐露し、呼び起こそうとするのか。われらに浴びせられた非難を理解しなかった者がいるというのか。かの者がかつての企てに終止符を打ったとするならば、どこで、いつ、それは明らかにされたのか。われらは昔日の罰をいまや考える必要はない。考えるべきは現在受けている仕打ちなのだ。汝らも知っているだろう、かの者があらゆる人々を自らの信仰へと入信させようとしていることを。

十三 われらは時間と日々を無為に過ごしてよいのか。心を燃え立たせることがわれらには必要ではないのか。われらは耐えなければならぬのか、かの者を信奉するアジアの民の勢力が日々増していることに。かれらがユダヤの地を支配し、かの者の栄光と名がますます広く知られることに。「それらのことが」さまざまに言語で語られ、詩歌に表現され、新たな銅版や大理石に刻まれることに。

十四 どうするのだ、われらの崇める像が「破壊されて」地にばら撒かれたら。われらの祭壇がかの者に捧げられた祭壇に変えられ、人々がかの者に向って祈り、かの者のために焼香して、金や香料を奉納するならば。これまでわれらに門戸を閉ざす寺院がな

かった地域で、われらが神事を執り行うことができなくなれば。多くの人々から常にもたらされた貢物がわれらのもとに届かなくなり、ブルートーンが空になった王国に住まうことになれば。

十五 ああ、「そのようなことは」起こらないだろう。汝らは昔日の勇ましい精神を今でも宿しているのだから。われらはかの日、鉄と燃え盛る炎で武装して、天の帝国を相手にして戦った。われらはその戦いにおいて敗れたが余はそのことを否定しない、「神を打倒するという」恐るべき計画は武勇をもって推進された。何故によってか勝利は神にもたらされたものの、不屈の闘争はわれらの栄光となったのだ。

十六 だが、汝らをこれ以上引き留める理由があろうか。出発するのだ、余の信頼を得た仲間たちよ、余に力と勢いとを授ける者たちよ、急いで進んで、悪党ども（キリスト教軍）を打ちのめすのだ、奴らの勢力が増さないうちに。ユダヤの王国全体が炎に包まれないうちに、いまや燃え広がりがつつある戦火を消すのだ。奴らの間に入って、奴らの息の根を止めるために、武力がある時は行使し、策略がある時は巡らせよ。

十七 余の望みが運命の定めとならんことを。すなわち、ある者は自己喪失して流浪の旅に立ち、ある者は殺され、ある者は愛の官能的なもてなしを受けて甘い視線と微笑みの虜となる。反乱を起こした軍勢が武器をその統率者に向けて、自らの間でも分裂を引き起こさんことを。「キリスト教軍の」軍勢を壊滅させ、崩壊へと導き、奴らと共に奴らの痕跡もすべて破壊して打ち捨てるのだ。十八 神に対して反逆した者たちは「王の」言葉が終るのを待た

ずして星々が輝く外の世界へと向かって飛び立ち深い闇に包まれた地獄を後にして、うなりを伴った激しい風が自らの生育の場であつた洞窟から飛び出して空に暗雲をもたらすように、戦争を海や地の広がる広大な地域にもたらさんとした。

十九 さまざまな方面に向かつて飛翔したこれらの者は、あつという間に世界の諸地域に散っていき、人々が思いもよらなかつた新しい手口の詐欺を働いたり、魔法を使つたりし始めた。だが、詩の女神ヘーテよ、あなた御自らが宣つてください、いかにして、どの地域で、キリスト教徒に対する最初の攻撃が行われたか。あなたはそれをご存じですが、遠い過去に行われたその攻撃に関して私たちはわずかの伝承に頼るしかないのです。

二十 ダマスカスとその周辺の都市は、高貴で、著名な魔術師イドラオーテによって支配されていたが、かれは若い時から占いの研究に没頭し、ますますその研究に熱中していた。しかし、優劣が定かでない戦の結末を予言することができなかつたのであれば、それは何の役に立ったのであろうか。流星や恒星の位置からも、地獄からの返答によつても、真実は予言されなかつたのである。

二十一 この魔術師は（ああ、盲なる人間の心よ、おまえが下す判断は無益で、間違っているのだ）無敵を誇る西洋の軍勢に対して天が破壊と死を与えるであろうと判断した。この戦いにおいて最後に勝利を得るのはエジプト軍だとかれは考えたのであり、ゆえに自らの民がその勝利に貢献して略奪品の一部と栄誉とに与ることを欲する。

二十二 だが、フランス軍の武勇を高く評価し、流血を伴う勝利の過程で犠牲者が出ることを危惧するかれは、何らかの策略でもってキリスト教軍を戦いの前にいくらか弱体化させて、それによって、次にエジプト軍とかれの軍勢の連合軍がより難なく「キリスト教軍を」鎮圧できるようにしようとする。こうした計画を練っていたかれのもとに、邪悪な天使が飛来して、かれをそそのかして、いっそう駆り立てる。

二十三 この天使はかれに忠告を与え、戦いを優位に進めるために有効な方法を示す。かれの姪は東洋で最も美しいという評判の女性であるのだが、彼女は明晰な知性を備え、女あるいは魔女が密かに働く詐欺にも通じている。かれはこの女性を自らのもとに呼び寄せ、自らの計画をかのじよに打ち明け、その推進役を担うよう命じる。

二十四 かれは言う、「おお、愛しきわが姪よ、おまえは金髪の髪をもち優しい表情の顔をしているが長老にも劣らぬ思慮深さと雄々しい心を内に秘め、わしが編み出した魔術においてもわしをすでに凌いでいる。わしは大なる計画を練っておる。もし、おまえがそれに手を貸すならば、結果は希望に転じると思うのだ。わしが用意して示す布地をおまえは織物に織るのだ、用心深い老人を助ける勇敢な女活動家よ。

二十五 敵軍の陣地へ行って、そこであらゆる女の技を使って、愛をおびき寄せるのだ。願いを涙で濡らし、蜜で甘くするのだ。とぎれとぎれに話し、話しながら溜息をつくのだ。美しいおまえが悲しみ嘆く様を見れば、強情な男たちの心も、おまえの意のま

まに曲がるのだから。過剰な大胆さは恥じらいをもって包み隠し、嘘を真実のマントで飾るのだ。

二十六 甘い視線と飾り立てた言葉で、能うならばゴツフレードを誘惑して、おまえの虜となったこの男が開始された戦をいまや煩わしく感じ、戦場をほかの地へと移すようにするのだ。もし、それができないならば、他の者の中から中心的な男たちを選んで誘惑し、誰一人としてそこから戻ったことがない場所へ彼らを連れていくのだ。」その後「イドラオーテは」自らの計画を詳しく説明し、最後にかのじよに言う、「信仰のためならば祖国 のためならば、すべてが正当化されるのだ。」

二十七 美しさにかけても、女性らしさにかけても、若々しさにかけても、自らが卓越していることを誇ってやまない美しきアルミードは、この計画を実行するべく、夕暮れが迫った頃に出発し、人知れぬ裏道を一人で進んでいく。髪を編んで、女性的なスカートに身を包んだかのじよは、武装した連戦連勝の人々を打ち負かそうともくろむ。しかし、かのじよの旅立ちについては、やがてさまざまな噂が人々の間に故意に流され、飛び交う。

二十八 若き女性は数日後、キリスト教軍が野営をしている場所に到着する。類まれなる美女が出現したことで「キリスト教軍の男たちは」ひそひそと話をし始め、誰もがかのじよに見入った。

昼の光のもので、は見られなかった彗星や星が空に輝くのを見た人々がその空のほうへ進むように、異境の地からやってきたこの美人のほうに皆が進み出て、かのじよが何者で、誰がかのじよを送り込んだのかを探ろうとする。

二十九 身のこなしにおいても、麗しさにおいてもこれほど優れた女性はかつてのアルゴスにもいなかったし、キュプロスやデーロスでも見られなかった。かのじよの金髪の髪は、ときには髪を包む白いヴェールに透けて、ときには何によつても覆われずに、輝きを放つ。それはあたかも、晴れ渡った空のもとで、或るときは太陽が白い雲に透けて見え、或るときは雲から顔を出した太陽が明るい光を放つて、周囲を明るくするかのようである。

三十 もとより縮れて波打ったかのじよの髪はいまや解かれ、その髪を微風が撫でて、いつそう波打たせる。悪意を秘めたかのじよの視線は自らの内へと向けられ、その視線と愛とが保有する宝物も包み隠されている。かのじよの美しい顔は大理石のように白かったが、その白さに淡い薔薇色が混じり、両者は相まっていく。だが、愛の微風を噴き出す口元だけは、可憐な薔薇の色、一色に染まっていく。

三十一 美しい胸元の雪のような肌をかのじよが露わにすると、愛の炎がそこから発せられ、勢いづく。若々しい乳房の一部が見えるようにされるものの、その一部は嫉妬深い衣服に隠されていて、人々には見えない。しかし「(衣服によつて)視線が遮られるならば、愛の炎が点された心はもはや静観していない、それは外観の美しさに満足しないで、隠された秘密の中にまで入り込んでいく。

三十二 光が水や水晶を自らの姿を変えずに通過し、また水や水晶が光によつて分けられたり砕かれたりしないように、かの心は衣服を大胆にも通過して侵入が禁止された部分にまで達する。そ

の場所で「(心は)動き回り、さまざまな驚異に関して、真実をひとつひとつ確かめようとする。そして「確かめた」真実を欲望に報告・描写して、欲望の中で自らの愛の炎をいつそう激しく燃え立たせる。

三十三 情欲に駆られた男たちの間を進むアルミィダに称賛と視線とが向けられ、かのじよもそれを察知する。表情こそ変えないものの、心の中ではほくそ笑み、企ての成功と虜の獲得を確信する。自らをキリスト教軍の司令官のところへ導くよう、少し遠慮がちにかのじよが願ひ出たとき、キリスト教軍の最高司令官の兄弟であるエウスターツイオがかのじよの前に進み出た。

三十四 蝶が光に向かうように、かれは神々しい美の輝きのほうを向くと、慎ましいアルミィダが下へと向けていたその静かな眼を近くで見ることが欲した。炎が近くに置かれた火口に移るように、かのじよの眼から発せられた大きな炎はかれに燃え移り、かれの中に宿った。そしてかのじよに向つて、若さと愛の熱ゆえにずぶとく大胆になったかれは、次のように言った。

三十五 「女性よ、そう呼ばれることがあなたにふさわしいか否か(定かならねば)、それはあなたが地上のお方とは思われなければこそ、天上の清らかな光をかくもたくさん授けられたアダムの娘が地上にいなければこそ、あなたは何を探し求めておられ、どこから来られたのか。あなたの、然らざれば私の、いかなる運命に導かれてここへたどり着かれたのか。あなたが誰であるか教え給え、あなたを崇める私が間違いを犯さないように計らい給え、もしそれが正しいことであれば、私に跪かせ給え。」

三十六 かのじよは答える、「あなたから賜った賞賛はあまりにも高く飛翔して、私はその高みに達することができません。貴人よ、ご覧ください、私は命ある者であるばかりか、喜びからずに見放され、ただ苦しみと共に生きています。私に降りかかった災難が、若い女である私を流浪者、逃亡者とし、この地へと導いたのです。私は敬虔なるゴツフレードを頼りとし、信頼していません、ゴツフレードの善良さは巷で評判になっていのです。」

三十七 あなたよ、どうか司令官に私が謁見できるように計らい給え、あなたが―私はそう見受けるのですが―高潔で情け深い方であるならば。」するとかれは言う、「兄弟である者のもとにその者の兄弟があなたを導き、執り成し役を務めることは理にかなっている。美しき乙女よ、あなたの願いは成就されよう。私は司令官に対して少なからぬ影響力をもっている、司令官の権力が、あるいは私の剣が役に立つならば、あなたはそれらを好きなように、好きなだけ利用されるがよい。」

三十八 エウスターツイオは話し終えると、かのじよを連れて軍勢たちのもとから離れ、ゴツフレードが主だった武将たちに囲まれている場所へ向かった。アルミードはゴツフレードに恭しく跪くと、はにかむ少女のように、一言も話さなかった。しかし、赤面して震えるアルミードを司令官である武将は元気づけ、安心させる。そこでかのじよは用意していた虚言をいよいよ述べ始めるが、その甘美な語り口は聞く者の感覚を魅了するものであった。三十九 「無敵の王子よ、かのじよは言う、「あなたの大きいなる名はかくも尊い賞賛とともに世に伝わって、あなたによって打ち

負かされ、あなたに戦争で敗れた国々や王たちが、「敗れたことで」栄光に与るほどであり、あなた御自らもその武勲によっていたるところで知られています。敵からもあなたの武勲は愛でられ、称えられ、あなたの敵までもがあなたに信頼を寄せ、あなたを探し求め、あなたに助けてもらおうとしています。」

四十 そして私も、かくも「キリスト教とは」かけ離れて、あなたが貶めて、消し去ろうとしている宗教のもとで生まれた私までもが、あなたの力によって、私の両親が所持していた高貴な位と王権とを回復したいと思っているのです。もし私たちの親族に助けを求めて外国の勢力に対抗しようとする者が「私の国に」いるならば、親族の者たちに慈悲の心はいまや残っていないのですから、私は私の血に反しようとも敵の剣に懇願するのです。」

四十一 私はあなたに乞い、期待しています。あなただけが、（私がそこから追われた）あの高座に私を引き戻すことができます。あなたの右腕は他人を地に跪かせるだけではなく、他人を引き上げることに長けています。慈悲深いことは敵に勝ち誇ることによりも価値があります。あなたが多くの国を征服して榮譽を得たならば、いま私を国に戻すことによって授けられる榮譽もそれに劣らないものでしょう。」

四十二 もし私の信仰が「あなたの信仰と」違うことをあなたが問題にして、私の正義にかなった願いを聞き入れないならば、あなたの慈悲の内に私が抱いている確かな信頼が私を助けるはずで、その信頼が裏切られることは不当だと思ふのです。私の証人は全ての人を助け給うかの（「ユツピテル」神であり、あなたは「ユツ

ピテル神を信奉しないがゆえに」他人をあまり助けてこなかったのです。しかし、全てのことをあなたが十分に理解できるように、私の不幸な身の上と他人の策謀について、あなたにお話しすることにいたしました。

四十三 私は美しき国ダマスカスを支配していたアルピランの娘、アルピランは「王位につく者にふさわしくない」卑しい生まれの人でした。しかし美しいカリクリアを彼は妻として迎え、かのじよは自らの国の支配者に彼をしようと思いました。かのじよが亡くなったのは私が生まれる直前でした、私がかのじよの子宮から出てきたとき、かのじよはすでに絶命して横たわっていたのです。

かのじよの命日であるその不吉な日は私の誕生日となったのです。四十四 しかし、かのじよが死のヴェールをつけた肉体から離れてそれからかろうじて五年が経ったとき、私の父が運命の定めに従って天で母とおそらく再び結ばれることとなり、私の養育と国の統治は私の叔父（イドラオーテ）に委ねられたのです。父は自分の弟（イドラオーテ）に大きな愛情を注ぎ、もし生きた人間の胸に宗教心が宿るならば、父は「死後」叔父から崇められたことでしょう。

四十五 この男は私の世話役となり、私が困らないように何でも喜んでして、その邪心のない心、子に対する愛情、多くの信心深い言行については人々も感服していたのですが、悪意に満ちたその企てを正反対の外面の下に隠していたのか、あるいはかねてから純粹にそうした期待をもっていたのか、叔父は自らの息子に私を嫁がせようとしていたのです。

四十六 私は生育し、その息子も生育しましたが、その息子は騎士道におけるたち振る舞いや、その雅な術を学ぶことはなく、洗練されたことや上品なことはいっさい好まず、高い志を抱くこともありませんでした。容姿は醜く、性格も臆病で、高慢な心の中では食欲が煮え立っていました。行動は粗野で、品行も同様で、悪徳に関しては他に並ぶ者が無いほどでした。

四十七 さて、私の善き養育者（イドラオーテ）はかくも立派な男に私を嫁がせるように取り計らい、息子が私と寝床を共にし、私の国に関与するようにしたのですが、そのことを私にはっきりと何度も言いました。叔父は言葉巧みに、策略をもって、知恵を絞って、自らの思い通りに事が運ぶようにしました。しかし叔父が私から同意を得たことは一度もなく、私もいつも拒否し、さもなければ沈黙していたのです

四十八 どうとう叔父は暗い表情をして去って行きました、その表情には叔父の邪悪な心はつきりと表れていました。そこには将来の私の不幸が書いてあるようにも思われました。それから、不気味な夢や亡霊が私の眠りをいつも妨害するようになり、私の身に危険が及ぶという予言をはっきりと聞くにいたって、私は心に大きな恐怖を覚えたのです。

四十九 青白い表情で、悲嘆にくれた様子で、私の母親の亡霊がしばしば私の前に現れました。ああ、その顔つきたるや、何と違うことか、前に他の場所で見たと、肖像画に描かれた母の顔つきとは。「娘よ、逃げなさい。」、母は続けて言いました、「邪悪な死神がおまえに近づいています、すぐに出発するのです。おまえを殺

そうとして、不実な独裁者が毒と武器を用意しているのが私にはわかります。」

五十 しかし、いまや身近に迫った危険を私の心が予知したとしても、年若き私が恐怖によって何もできなかったとすれば、その予知は何の役に立ったのでしょうか。祖国を自ら捨てて逃げ、祖国から何も持たないで出るということは、私にとっては考えられないことで、むしろ自分が生まれたその場所で死んでしまうほうがよいように私には思われました。

五十一 私は、ああ（！）死を恐れました。そして死から逃れる勇氣も（誰もそれを信じないかもしれない）持っていませんが、持っていないのです。私は自分の恐れが（叔父に）知られることも恐れていました。それによって、私の死ぬときが早くなると思ったのです。このように不安で取り乱しつつ、苦しみから解き放たれることなく、私は生きてきました。自らの首をはねる残酷な刃がいまにも自分の上に落ちてくるのを待っている死刑囚のように。

五十二 私がそのような状態にあったとき、偶然が私に味方してか、あるいは私がいつそう大きな苦しみの中に置かれる運命にあったためか、王である父に子供の時から育てられ、王宮に仕えるひとりの男（アロンテ）が私に明かしたのです、かの圧政者（イドラオーテ）が定めた私の死の時が迫っており、かれ（アロンテ）がまさにその日、私に毒を注ぐことをかの残忍な男（イドラオーテ）に約束したということ。

五十三 そしてこの男は私に、私が生き延びるには逃げるしかないことを告げ、私が他に助けを求めることができないということ

を知ると、ただちに自らが私の救出者となりました、この男に私は元気づけられて、それによって恐怖を感じなくなったので、祖国と叔父から逃れるべく、闇の中をこの男と共に進むことにしたのです。

五十四 普段よりも暗い夜の闇に周囲が包まれると、私たちもその友なる闇に身を隠し、苦難を共にするべく私が選んだ二人の侍女に守られて私は町の外に出ました。涙で濡れた視線を私は自分の後方にある祖国の城壁のほうへ向けましたが、生まれた地の情景を、そこから離れるにあたり、眼に十分に焼き付けることはできませんでした。

五十五 眼と想いとは同じ方向（後方）に向かっていますが、足は前方に向って進んでいました、激しい嵐に突然襲われて愛する岸边から遠ざかる舟のように。私たちは一晩中歩き、翌日は一日中、人が通った跡のない土地を進みました。私たちはひとつの城に着きましたが、そこは私の王国の領土の端でした。

五十六 城はアロンテのものでした。アロンテは私を危険から救い、導いた男です。しかし、かの裏切り者（イドラオーテ）は自分が仕掛けた罠に私が掛からなかったことに気づき、私たちに対する怒りで燃え上がり、自らの罪を私たちに着せようとして、自らが私に対して試みた裏切り行為を私たちがしたとして、私たちを犯罪者にしたのです。

五十七 かれ（イドラオーテ）は言いました、私がアロンテに賄賂を贈り、「アロンテをして」かれの飲料に毒を混ぜさせ、私が誰からも束縛を受けたり、静止を命じられたりすることがないよう

に、かれを殺そうとしたと。また、私が淫乱な性向の趣くままに自分の胸の中に多くの愛人を取り込もうとしたと。ああ、聖なる貞潔よ、汝の掟を私が破ることがあるならば、その前に天の炎を私の上に落としたまえ。

五十八 かゝの粗野な男（イドラオーテ）が黄金で空腹を、私の無垢なる血で渴きを癒そうとするならば、それは私にとっては痛ましいことです。しかし私の心をもっと締め付けるのは、彼が私の汚れない名誉を犯そうとしていることです。かの悪人（イドラオーテ）は人々から非難されることを恐れ、自らの虚言をこのように飾り、構築し、事実を知ろうとする民が私を擁護して蜂起しないようにしたのです。

五十九 かれはいま私に代わって王座に座り、かれの頭部には王冠がつけられています。私を傷つけ、侮辱することをやめようとするどころか、ますますその獣性を露わにしています。アロンテに対しては自らの意思で囚われの身とならないならば、城の中で焼き殺すと脅しています。そして私と、ああ、私と運命を共にする侍女たちに対しては、暴行を加え、その体を引き裂いて、殺すと言っています。

六十 彼がこのように言うのは、それによって顔に塗られた恥を洗い落とし、私によって汚された一族の名誉と王権をもとの状態に回復しようとするからなのです。しかし、この計画の背後にあるのは恐れであり、かれは本当の王位継承者である私から王の笏を奪われることを恐れているのです。かれは私が死なない限り、私から譲り受けた自らの王国の中で支配を強めることができない

のです。

六十一 この邪悪な企みは間違いなく、圧政者（イドラオーテ）が心の中で思い描いた通りの結果を生むでしょう。そして私の涙によっては消えることがないであろう悪意は、あなたがそれを禁じないかぎり、私の一族のもともみ消されるでしょう。わが君主たる方（ゴツフレード）よ、私はあなたのもとに身を寄せます。私は哀れな少女であり、孤児であり、無罪の者であります。あなたの足もとに流された私の涙によって私が助けられ、これ以上の血を私が流さなくても済みますように。

六十二 傲慢な者や邪悪な者を踏みつけるこの足によって、正義を擁護するこの手によって、あなたの輝かしい勝利によって、そしてあなたが助けを祈願し、保護しようとしている神殿によって、私の願いが叶えられますように（あなただけが私の願いを叶えられるのです）。あなたの慈悲によって、私が私の王国とひとつになつて、生きながらえることができますように。しかし慈悲だけでは何も成就しません、正義や理性の力によってあなたが動かされますように。

六十三 天はあなたに対して、正義を希求する心を受け、運命はあなたに対して、望むことを実現できる力を授けました。あなたは私の命を救うことができ、私の国を（もし私がそれを取り戻すならば、それはあなたのものになるのですから）獲得することができます。あなたに従う大勢の強い者たちの中から十名を私が連れていくとお許しください。私は町の長老たちと親しく、市民たちも信義に厚いので、それだけの人数の男たちに付き添われる

ならば、私は古巢に戻ることができます。

六十四 長老の中でも筆頭の位にいる者のひとり、秘密の扉の管理を委ねられた信頼のできる男なのですが、その男が扉を開けることを約束し、王宮の中に夜のあいだに私たちを導いてくれませう。その男が私に願うのは、あなたから何らかの援助を私が賜うことであり、その援助は、あなたがどんなに小さなものであっても、大勢の者たちを他の場所から集めるよりもはるかに大きな安心をもたらし、あなたの名と旗印にはそれほど大きな力がある、とその男は考えているのです。」

六十五 アルミードはこう述べると、沈黙して返答を待ったが、その沈黙に声と願いが込められていることを態度で示しているかのようにだった。ゴツフレードは疑いの念を募らせつつも、さまざま考えのもとで結論を保留し、どういつた決定に向うべきか見当がつかなかった。異教徒の策略を恐れ、神に対する信仰を持たない者に誠実な心がないことは十分に承知していた。しかし、他方においてかれは、高潔な心の中ではまどろむことがない憐みの情に呼び起されたのである。

六十六 ゴツフレードに生来備わった憐みの情は、アルミードに援助の手を差し伸べるよう「かれ自身に求めたが、政治的な有用性もかれは考慮したのだ。ダマスカス王国を統治する者がかれの命令に従い、かれの計画のために道を切り開き、その道を通りやすくするならば、また、エジプト人たちやその仲間の者たちに對抗して、兵や武器や財宝を彼に供給するならば、それは有益だとかれには思われたのである。」

六十七 疑い深いゴツフレードが視線をこのように地に向けて考えを何度も巡らしている間、女性（アルミード）はゴツフレードを見つめ、その視線はかれの顔から離れず、かれの一举一動を観察した。ゴツフレードの返答が予想したよりもずっと遅かったので、アルミードは不安になり、溜息をついた。ゴツフレードはアルミードの懇願を最後は受け入れなかったのであるが、きわめて丁寧で、穏やかな言葉で返答した。

六十八 「私たちの剣が神への奉仕のためにここで用いられないとすれば（神はまさにその目的のために私たちを選ばれたのであるが）、あなたは私たちの剣にあなたの希望を託し、慈悲のみならず、救助の手をも見つけるであろう。しかし、これらの民と王政に苦しむ町を以前の平和な状態に戻すことが私たちには先決なのであり、兵力を減らすことで、私たちが勝利へいたる時間を伸ばすことは正しくないのだ。」

六十九 私はあなたに約束しましょう（あなたは私の誓いをこの約束の確かな証として、それを信じて生きるのです）、もし私たちがこの聖なる、そして天の愛を受けた町を不当な支配から解放することができたならば、今度はあなたが失った王国にあなたを連れ戻すことに、私たちは、慈悲に導かれつつ、全力を尽くしましょう。あなたに対する慈悲の心は、もし神が受けるべきものを先に私が神に献じなければ、神に対する私の忠誠心を損なうことになるのです。」

七十 ゴツフレードの言葉を聞いて、アルミードは眼を下にじつと向けて、しばらく身動きをしなかったが、涙で濡れた眼を上げ

ると嘆きの痛ましいしぐさをして喚いた。「何と哀れな女。天はこれほど苛酷で進展なき人生を、他のいかなる女に対して定めたもうたことか。私の耐え忍びがたき運命が変わらぬうちに、他の者〔ゴツフレード〕の心や性格を〔天は〕変えたもうた。

七十一 いまや希望はなくなつた、私の嘆きも無駄であり、願いが人の心を動かすこともなくなつた。私に許されるのは、あなたを動かさなかつた私の嘆きが邪悪な圧政者の憐れみを誘うようにと、願うことだけなのでしようか。あなたが無慈悲であることを、私は非難しようとは思いません、なぜならば、私に対する小さな援助を断つただけなのですから。しかし、天を私は責めず、私の不幸は天から発しているのであり、天が同情心をあなたに植えつけないのですから。

七十二 それは、わが主人である方よ、あなたでもあなたの善き心のせいでもなく、私は私の運命によつて、援助を拒否されたのです。残酷な運命よ、不吉で邪悪な運命よ、この忌むべき人生をいまこそは終わらせるがよい。優しい両親をかれらが若いときに私から奪つたことは、ああ、小さな悪であつた、王国を奪われ、囚われの身となつた私が刃の犠牲となるのを、おまえがまだ見ていなかったとしたら。

七十三 謙譲の掟に従い、謙譲を重んじる者であるがゆえに、私はここにかくも長く留まつていることはできません、その間どこに身を寄せれば、どこに身を隠せばよいのでしょうか。暴君から逃れる場所はあるのでしょうか。金によつても開かないほどしっかりと閉じられた場所は、この世にない、とするならば、ぐずぐず

とはしていられないのでしょうか。死の姿が私には見え、死から逃れることができないならば、この手によつて死のもとへ行きましよう。

七十四 こう言うと黙つた、王室の気品を漂させた怒りでその表情は燃えているかのようにあつた。足を反対側に向けて、立ち去ろうとするしぐさをしたが、その動作はもの悲しさと侮辱を含んでいた。怒りが悲しみと混じり合つたときしばしば人は泣くが、そのようにかのじよは気持ちを抑えることなく泣き始めた。かのじよの眼からあふれ出る涙は、太陽の光を受けて輝く水晶や真珠のようであつた。

七十五 衣服の裾まで流れ落ちる煌めく水玉が一面に撒かれた両頬は、雲のようになつた水滴によつて湿り気を帯びた白と朱色の混ざつた花々のようであり、暁の最初の光が射すとき、爽やかな微風に向つてそれらの花が花弁を開けている様であつた。そして花々を見て、花々に喜びを感じる暁は、自らの頭髮をその花々で飾ることを欲するのである。

七十六 しかし、かくも多くの露で美しい頬や胸を飾っていた明るい雨は、炎と化して働き始めるのであり、何千もの者の胸に密かに入り込み、そこで燃え広がっていく。おお、愛神の仕業である奇跡よ、涙から炎を生み出し、心を水の中で燃え上がらせる。愛神はつねに自然を凌ぐ存在であるが、この女性の力によつて、

〔普段の〕自らさえも凌いだのだ。

七十七 この偽りの悲しみは多くの男たちに本当の涙を流させ、かたくなな心の持ち主さえもほろりとさせた。誰もがかのじよに

同情し、口々昏った、「もしゴツフレードの慈悲をかのじよが受けることができないというのであれば、かれ「ゴツフレード」の乳母は獐猛な虎であったにちがいない。そしてかれを生んだのは峻厳な高山のおそろしい岩か、砕け、泡立つ海の波であったのだ。これほどの美女を嘆き苦しめるとは、彼は何と残忍なのか。」

七十八 だが、他の者たちが各々につぶやいたり、黙ったりしているとき、誰よりも強く燃える慈悲と愛の松明をうちに宿すエウスターツイオが前に進み出て、大胆な発言をする。「指揮官であり兄弟である者よ、あなたの意志はその最初の決定にあまりにも執着しています、もし他の者たちと（かれらはみな、あなたが少し譲歩することを望み、願っています）あなたが折り合いをつけないとすれば。」

七十九 部下の兵士たちを率いてここにいる武将たちが異教徒に支配された町「エルサレム」から離れることができ、かれらが自らの役目を果たしていないとは、もちろん私も思っていない。だが、遍歴の騎士である私たちは何らかの任務を負うでもなく、他の者たちほど規則に縛られていないのですから、私たちの中から十人の正義の擁護者を選ぶことは、あなたに許されたことなのです。

八十 清らかな乙女を護る男は神への奉仕をしているのです。そして天にとって貴重な宝であるのは圧政者を死刑に処した者が天に掲げる戦利品なのです。私は戦うことで得られる確かな利益のために「圧政者のイドラオーテとの」戦いを望んでいるわけではありません、少女たちを助けることは、騎士の世界では当然の行為

であり、私はその義務感から戦いに向かおうとしているのです。八十一 ああ、願わくば、フランスで、あるいは騎士道精神が称えられている国々で、私たちがかくも正当で敬虔な理由によって危険と労苦とを避けたということが語られるであろうというその予想がはずれんことを。私はここに自ら兜と甲冑とを置き、ここで剣を腰から外します。これからは武器や馬を不相応に用いることも、騎士という名を用いることもないでしょう。」

八十二 エウスターツイオがこのように話すと、かれの仲間たちは皆大きな声を発してかれに賛同し、体を震わせた。そして有益で正しい決定を下すよう求めて、司令官「ゴツフレード」の周りに集まり、かれに迫った。ゴツフレードが言う、「多くの諸君の一致した意見に私は譲歩して、従うことにする。諸君が望むならば、この女性にかのじよが望むものを与えるがよい、私の決定ではなく、諸君が決めたこととして。」

八十三 だが、もしゴツフレードが諸君の信望をまだ少し集めているのであれば、情熱を抑えるようにしたまえ。「かれはこのようにだけ言った、しかしかれらにとってその言葉は十分であった、各々の者はゴツフレードが与えたものを受け取ればよかったのである。それにしても、美女の涙にできないことはあるのだろうか、恋に誘う女性が語る愛の言葉に不可能なことはあるのだろうか。「アルミード」魅惑的な唇からは金の鎖が出て、その鎖は「男たちの」魂を意のままに捕えて、操った。

八十四 エウスターツイオはアルミードを呼んで、言う。「美しい少女よ、もう嘆く必要はないのだ。あなたはやがて私たちによつ

て救われ、その救いはあなたが募らせている恐怖に劣らないものだから。」するとアルミードは涙で曇った眼を澄み渡らせて、美しいヴェールで眼頭をぬぐい、非常に嬉しそうな表情をしたので、天までがかのじよの美しさを愛でたのであった。

八十五　そして甘く、優しい声で自らに授けられた大きな恵みに感謝し、その恵みがいつまでも世に知られ、いつまでもかのじよの心に刻まれるであろうことを、言葉でうまく表現できないときには、身振りを巧みに用いて無言のうちに伝えた。自らの意図をこのような偽りの態度の裏に隠し、男たちに疑わせる余地を与えなかった。

八十六　自らの策略が運命の微笑みによって順調に滑り出したのを見ると、計画に妨害が入らないうちにかくも邪悪な作業をやり終えようと心に決めた。そしてキルケーやメドゥーサが用いた魔術をも凌ぐ甘い動作や愛らしい表情でもって、またセイレーンのものかと思わせるほど美しい声によつて、最も目覚めた者たちまでを眠らせようとした。

八十七　この女性はあらゆる術を使つて、自らの網に恋焦がれる男を〔エウスターツイオの〕ほかにも誘き入れようとした、すべての男に同じ表情で、また常に同じ表情で接するのではなく、その時々に応じて顔つきを変えた。ある時は視線を内へと向けてはにかみ、恋心に逸る男を手綱でもって抑え、ある時はみだらで、誘うような視線を送つて恋心をなかなか起こさない男を鞭でもって突き動かした。

八十八　自らに対する恋から醒めた男や疑いの念を抱いて消極的

になった男を見つけたならば、やさしい笑みを投げかけて、嬉しそうな澄んだ眼で顔を見つめ、その眼を愛らしく回した。こうして自らに求愛するのが遅かったり、恥ずかしがったりする男たちを刺激して、かれらのかすかな期待を膨らませ、その恋の炎を燃え立たせることで怖れが宿している冷やかさを彼らから取り除こうとした。

八十九　また、盲目で恐れを知らぬ首領（愛神）に導かれた別の男たちが度を超えて大胆になれば、優しい言葉や愛らしい眼を彼らに向けるのは控え、畏怖や畏敬の念を抱くよう論じた。だが、顔をしかめて軽侮感を示しても、その顔にはなお一筋の憐みの光が輝き、ゆえにかのじよに恋した男は慄きつつも、絶望はしなかった、かのじよが尊大に見えれば見えるほど、男はかのじよに夢中になった。

九十　ときにかのじよは少し離れたところに行つて、悲しんでいるかのような表情や態度を見せたり装つたりした。眼もとにまでかのじよの嘆きはしばしば伝わったが、その嘆きをかのじよは中へと押し込めた。このような術で、大勢の純真な男たちを自らと共に涙ぐませ、愛神の矢を、かくも強い矢を受けた心が愛神に屈するように、憐みの火で鍛えた。

九十一　次に、かのじよはその悲しみを忘れて、新たな希望を抱くにいたつたかのように、自らに恋する男たちのほうに足を向け、かれらに向つて言葉をかけると、喜びで顔を覆つて、飾つた。そして澄んだ視線と、美しく神々しい笑みを、男たちの胸に自らが先ほど生じさせた悲しみの暗く、濃い霧の上で二つの太陽のごと

く、きらきらと輝かせた。

九十二 しかし、愛らしく語り、愛らしく微笑み、二重の愛らしさで男たちの感覚を酔わせている間、かのじよはかくも大きな慰めに慣れていない男たちの魂を、かれらの胸からほとんど切り離してしまった。ああ、残酷な愛神よ、あなたが私たちに調合する蜜と苦い汁は、どちらも同じように私たちを破滅させ、あなたからいつも同じように致命的な病氣と治療薬とがもたらされる。

九十三 アルミードはこのように正反対の態度を見せて、氷と火、微笑みと嘆き、恐れと希望との間で、自らの心の動きを男たちが推察できないようにして、男たちはこの欺瞞で満ちた女によって弄ばれた。もし誰かが、弱々しく震える声で語って、自らの苦しみ的一端に触れるならば、かのじよは自分が恋について無知で、その経験もないかのように、その者の言葉に含まれた愛の感情が分らないふりをした。

九十四 もしくは眼を慎ましく下方に向け、赤面して、その頬の赤らみによって自らを飾った。そのため冷たい霜は美しい顔に広がった薔薇の下に、隠れて見えなくなった。それは夜明けの光が朝の爽やかな時間に最初に射すのを見るかのようにだった。そして怒りを含んだ赤らみが恥じらいの紅潮とともに現れ、両者は混じり合って、区別がつかなくなった。

九十五 しかし、ある男の動作を見て、その者が熱い恋心を明かそうとしていることに気づいたならば、その男のもとから離れ、逃げた。そして話す機会を男に与え、すぐにそれを男から奪った。こうして一日中、かのじよは男を無意味な放浪へと導き、疲れさ

せ、失望させ、希望を男から奪った。男は追っていた獣の足跡を夜になって失った狩人のように、そこに残された。

九十六 こうした術で、かのじよは多くの男たちの心を欺瞞によって手に入れた、いな、それらは男たちの心を奪うための武器であり、男たちの心は否応なしに愛神の奴隷となった。勇敢なアレウスが、そしてヘーラクレスやテーセウスが愛神の虜となるならば、何と驚くべきことだろう。キリストのために剣で武装した者までをも、かの不敬虔な者〔愛神〕はみずからの縄で締め付けるのであろうか。

第五歌

六十 その頃、他者を欺く邪悪な女は自らの助っ人となる者を依然として探し求めている。日中は自らの技や才知や美貌を存分に発揮して、兵士たちに哀願した。だが、夜がその暗いマントを広げて東の空に日の光を閉じ込めると、二人の騎士と二人の付き添いの婦人に囲まれて離れたところにあるテントの中へ引き下がった。

六十一 かのじよは人を騙すことにかけては名人であったが、その物腰は優しく、振る舞いは洗練され、天がこれほどの美貌を他の女に与えたことは前にも後にもないと思われるほど美しかった。軍勢の中で名が知れた英雄たちは、かのじよに接して大きな喜びを感じ、その喜びはかれらを捉えて離さなかった。だが、敬虔なるゴツフレードだけは、かのじよの誘惑をもっても快楽の宴におびき寄せられなかった。

六十二 かのじよはゴツフレードに恋心を起こさせることも、官能でもって愛の営みへとかれを導くこともできなかった。満腹の鳥に向って誰かが餌を見せても降りてこないように、この世に何も求めないかれは、地上的な喜びを侮蔑していたのであり、人があまり通らない道を進んで天へ向かおうとしていたのである。だから偽りの愛がかれの崇高なる飛翔を妨げようとしても、かれがそのわなに掛かることはなかった。

六十三 また、いかなる障害物をもつても、ゴツフレードの信仰心を神が示した道筋の外に導くことはできなかった。アルミードは多くの技を駆使して試み、新しいプロテウスのごとく変幻自在の姿でかれの前に現れ、その愛らしい顔や仕草は冷たいまでに眠り込んだ愛神を自覚めさせるほどであったが、かのじよのあらゆる試みは（それは神の恩寵にかれが浴していたからなのだが）、功を奏せず、繰り返すことも無駄であった。

六十四 視線を向ければあらゆる純真な心を虜にすることができると思っていた美しき女御は、いまやその誇りも自信も失ってしまい、そのことに怒りを覚えるとともに、仰天した。最後には抵抗がより少ないと思われる男に狙いを定めてそこに自らの力を集中させる決断をしたが、かのじよは攻略困難な都市への攻撃をあきらめて、ほかの場所に軍勢を導く疲れた大将のようであった。

六十五 しかし、かのじよの攻撃にタンクレードの心も、ゴツフレードのそれと同じように、屈することがなかった。タンクレードの心は別の女性への想いで一杯になっていたもので、そこに新たな恋が入り込む余地はなかった。ひとつの毒でもって別の毒

から身を守ることができるよう、ひとつの恋は別の恋を寄せ付けなかったのである。これらの男だけにはアルミードも勝つことができなかったが、ほかの男たちについては、程度の差こそあれ、自らへの恋心で燃え上がらせた。

六十六 かのじよは自らの計画や策略が思うような結果をもたらさなかったことを残念がったが、多くの勇敢な兵士たちを虜にしたことで、幾分かは安堵の念を感じていた。そして他の者が欺瞞を見破らないうちに、虜にした男たちを安全な場所に移し、かれらの体をいま締め付けている鎖とはちがった鎖でかれらを縛ろうと考えた。

六十七 かのじよを何らかの形で援助するために司令官が定めた期間が過ぎたので、かのじよはゴツフレードの前に恭しく進み出て、言う。「統率者よ、定められた日はもう過ぎました、私があなたの軍団に援助を求めたことをかの邪悪な圧政者（イドラオーテ）が運命の偶然により知ることになれば、かれは防御のために自らの兵を集結させるでしょう、そうなるのかの試みはもはや簡単ではなくなるでしょう。」

六十八 ですから、誰のものかもわからない声やスパイの密告により圧政者に情報もたらされる前に、慈悲深いあなたは手下のうちで最も強い者数名を選んで、直ちに私と共に圧政者のもとへ送ってください。天が人間のやることを見て顔をしかめず、無罪の者を忘れなければ、私は祖国に戻る事ができますでしょう。そして私の国をあなたは、戦時にあっても平時にあっても、属国とすることができませんでしょう。」

六十九 かのじよはこのように言った。司令官はそれに対して自らが断れないことを察したのであつたが、かのじよが急いで出発するならば、「かのじよと共に行く者の」人選を自らがしなければならぬと思つた。だが、それぞれの者は十人の中に自分が人るように「ゴツフレードに対して」異常な執拗さをもつて懇願したのであり、懇願者たちの間に生じたライヴアル意識が執拗さに輪をかけていた。

七十 これらの心の内を観察するアルミードはこうした状況を見て、新たな手段による誘惑を試み、かれらの心に鞭や刺激を与えることで嫉妬がもたらす邪悪な怖れを吹き込んだ。こうした術を施さなければ愛がいずれ老いて、鈍く、遅くなることをかのじよはよく知っていた。競走馬が追いかけられたり、追いかけてたりしなければ、全力で走らないのとそれは同じなのである。

七十一 かのじよは男たちに言葉をかけ、男を誘惑する視線や甘美な微笑みを周囲に振りまいたが、その身のこなしはそれぞれの男が他の男たちを羨むようにするものであり、恐れと期待とをかれらの中に同居させるものであつた。恋する愚かな男たちは、かのじよが作る偽りの顔によって刺激され、自らを制することなく走り続けた。恥もかれらを制止させることができず、司令官の叱責にかれらは耳を貸さなかつた。

七十二 ゴツフレードは争い合う男たちのいずれの者をも満足させ、特定の男たちに偏ることがないように努めていたのであるが、夢想にふける騎士たちの姿を見てときに恥辱の念を、ときに怒りの念を覚えた。かれらがその望みをいつまでも断ち切らないので、

新たな提案をすることによってかれらと妥協しようとした。「きみたちの名前を書いて、壺の中に入れたまえ。くじによって決定する。」

七十三 ゴツフレードがそう言うと、それぞれの者は名前を書いて、小さな壺の中にその紙を入れた。「名前が書かれた紙が」混ぜ合わされて、出まかせに引かれる。最初に出てきた紙にはペンブロツィアの伯爵であるアルテミドローの名が書かれていた。続いてゲラルドの名前を読み上げる声が聞かれ、かれらの後にはヴィンチラオの名が書かれた紙が引かれる。この男はかつて非常に重々しく才覚のある人物であつたが、いまや恋する白髪の老人であり、子供のもようである⁽⁴⁾

・第四歌に関して西洋で描かれた挿絵を参考までに一七四五年版と一七六〇年版(いずれもヴェネツィアで刊行)より引用・掲載する。



第4歌の第38節



第4歌の第6節



第4歌の第39～64節



第4歌の第24～26節



第4歌の第82～83節

註

- 1 Ezio Ramondi. *Poesia come retorica*, Firenze, 1980, p.81
- 2 Torquato Tasso, lettera a Orazio Capponi (Uglio, 1576; nota del Tasso)
- 3 翻訳には以下の版を用いた。Torquato Tasso, *Gerusalemme liberata*, a cura di Roberto Mer, Salerno editrice, Roma, 1993
- 4 その後、籤によってアルミータを護衛する十人が選ばれるが、紙面の都合で以下は省略する。